

## 第2部会 勤労青少年

### 1. 女子勤労青年の職場生活と教育意識

大阪府科学教育センター 平 田 仁 宏

15～18才段階の勤労青年に対して、いかなる教育的配慮をするかは後期中等教育拡充整備方策の中心的課題である。われわれは、これら勤労青年教育に関する基礎的研究として、学校教育の立場から、中卒、高卒者の職場生活の実態や生活意識、従事している仕事と在学中に受けた教育との関係などについて調査研究を行なってきた。今回は、社会教育的配慮による、勤労青年学校制度を中心に勤労青年学校の全国的な形態や実施状況を調査するとともに、大阪府下で、この制度に編成されている女子勤労青年について、その職場実態や教育意識について調査した。そして、彼らの職場条件や生活意識、在籍している教育機関の実態や新しい教育制度に対する希望等を中心に調査結果を報告するとともに、今後の勤労青年教育に必要な制度、内容、条件などについて、2、3の提案をおこないたい。

### 2. 流入年少労働者の性格と適応

東京学芸大学 菊 池 美代志

この発表は、昭和40年より、東京学芸大学社会学研究室で、地方中学を卒業し大都会に就職した年少労働者を対象として、行われている動向調査研究のデーターの一部を利用してなされるものである。調査結果によれば、流入年少労働者は、一般に、出身社会背景において劣り、個人的資質（特に学業成績）において劣る。この傾向は、出身地域の高校進学率との間に相関が認められ、進学率の低い地域出身者よりも高い地域出身者において一層顕著であり、進学率の低い職業（農業）出身者よりも高い職業（非農業）出身者において一層顕著である。流入年少労働者は、今後進学率の上昇に伴い、こうした下積みの性格を一層色濃くしていくであろう。他方、進学率の上昇に伴い、雇傭問題の焦点は、中卒者を離れて、高卒者に移ろうとしている。この意味で、彼等は、ますます忘れられた存在になろうとしている。この研究は、彼等が都会生活に入るにあたって、いわば運命として背負って来た下積みの性格が、大都会とりわけ職場に対する適応にどう作用しているかを、明らかにしようとするものである。